

# 外国語教育における異文化理解の実践的アプローチ

## Practical Approaches to Intercultural Understanding in Language Teaching

佐々木 淳・柳 原 里枝子

SASAKI Jun and YANAGIHARA Rieko

キーワード：外国語教育・異文化理解・オンライン

### 1. はじめに

ますますグローバル化が加速していく中で、外国語教育ではいまだ知識重視の側面に比重を置いており、学習者が異文化に身を置いた場合に必要となってくる文化的な側面の習得への取り組みが遅れているようである。本研究では、学習者が異文化体験した場合、多様な文化を受容しつつかつ多様な人々と協働してコミュニケーションが図れるようになるための実践面での教育方法について、そのアプローチの可能性を探るものである。セクション2では、外国語教育における異文化理解について概観していく。セクション3では、英語の授業の中で World Englishes に焦点をあて、学習者に多様な人々と協働して学ぶ態度の涵養を促すようなアプローチについて論じている。セクション4では、地域の学校の国際交流に目を向け、学校だよりをグループで調べていき、英語訳を行うという授業内での協働作業についてのアプローチの可能性について探っていく。セクション5はまとめと今後の課題である。

### 2. 外国語教育における異文化理解とは

外国語教育において、教員は異文化理解に対する態度を受講生に涵養させることは共通の認識である。本セクションでは、異文化理解の涵養に関してヨーロッパ共通言語参照枠 (CEFR)、国際連合教育科学文化機構 (UNESCO) や文部科学省指導要領における記述を概観していく。

まず CEFR では以下のような記述がある。

In an intercultural approach, it is a central objective of language education to promote the favorable development of the learner's whole personality and sense of identity in response to the enriching experience of otherness in language and culture (Council of Europe (2001: 1))

外国語教育において異文化理解の涵養は、他者理解というだけでなく、受講者自身の人格形成や自我の認識を促すものとしている。また、UNESCO も異文化を理解することは世界の国・地域間での平和や協調性をそくしんするものとしている (Leo (2010: 15))。文部科学省指導要領においても、外国の文化に対する理解を深めていきながら、英語を通して多様な文化を持つ人々とのコミュニケーションを通じて異文化に対する理解を涵養していくとある

(National Curriculum Standards (2018: 143-144))。次セクション以降、筆者らが異文化理解に関して授業の中で実践した報告を行っていく。

### 3. 実践報告 1

#### 3. 1. 背景

昨今、新型コロナウイルス感染症のパンデミックへの対応や SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) などの取り組みに見られるように世界各地で起こっている様々な情勢や事象に関して、その地域やその国のみならず、世界各国が連携し、地球規模で問題に取り組んでいこうという大きなムーブメントが見られる。そのような状況で SNS やメディアを通じて世界共通語としての英語がますます大きな役割を果たしていると思われる。日本の外国語教育 (英語) においても、2021 年度より実施される文部科学省の新学習指導要領では「コミュニケーション」がキーワードとなっている。これまでの小学校から高等学校の言語構造や知識を教える授業形態から、今後はよりコミュニケーションに重点を置き、言語活動を通して生徒たちが自ら考え、課題に気づきを与える授業への転換が求められている。

世界のより多くの人々と英語でコミュニケーションを図るためには単に語学力を身につけるだけでなく、異文化理解力が重要であることは言うまでもないが、それをどのように養っていくかという点については外国語教育における大きな課題の一つであると考えられる。その最大の理由として考えられるのが、「異文化」という語や概念に含まれる要素があまりにも多岐にわたるからではないかという点である。異文化の対象は、思想、生活様式、歴史的背景、言語スタイルなど数多くの種類に分類され得る。さらにそれが国レベルで異なるものなのか、地域レベルで異なるものなのか、あるいは個人レベルで異なるものなのかを理解する必要がある。このように外国語教育において異文化をマクロ的視点から見ると、異なる文化の認識として異文化理解力を養うことにはなるが、それが英語運用能力とどこまで関連づけができるかが課題であると考えられる。したがって、外国語教育における異文化理解においては、異文化の何に焦点を当てて言語教育を行い、言語活動を通して対象となる文化を授業によって具体的に絞り込むことが重要であると考えられる。

また、日本人学習者、特に大学生の多くは、高校までの英語教材で **native speakers** によって話される英語には慣れているが、**non-native speakers** によって話される英語に触れる機会は少ないように見受けられる。世界における英語使用について Crystal (2003) は Braj Kachru によって提言された The three 'Circles' of English のモデルを紹介しており、このモデルでは、3 つの Circles のうち、Inner Circle は英語が母国語として使用される国 (例えば、USA, UK など) を指し、Outer Circle は英語が第二言語として使用される国や地域 (例えば、シンガポールやマレーシアなど) を指し、Expanding Circle は英語が外国語として使用されている国や地域 (例えば、日本や韓国や中国など) を表すとされている。また BBC によると、近年では中国で (第二言語あるいは外国語として) 英語を話す人口が、アメリカで母国語として英語を話す人口を上回っていると推計されている。また、British Council の世界の英語話者に関するデータ<sup>1</sup>によると、世界人口が約 72 億人と推定され、そのうち英語を話す人口は 15 ～ 20 億人で、内訳は約 3.8 億人 (25%) が第二言語として、7.5 億人 (52%) が外国語として、そしておよそ 3.5 億人 (23%) のみが母国語として英語を話すとされている (図 1 を参照)。

---

<sup>1</sup> 実践活動用のテキスト『Global Activator: Your English, My English, World Englishes! 大学生のためのグローバル時代の英会話』(金星堂) p. 11 より British Council のデータを引用している。

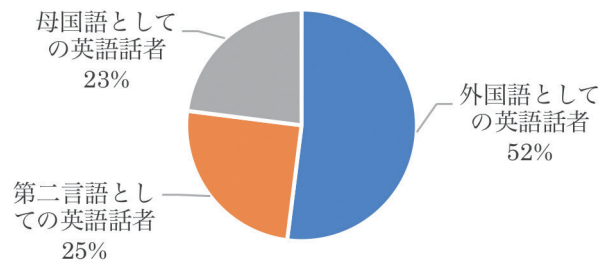


図1：世界の国際英語話者 Global English speakers in the world (塩澤・King, 2015)

すなわち、世界の英語話者は *native speakers* よりも *non-native speakers* の方が多いという実態がうかがえる。それにも関わらず、Kachru のモデルのいわゆる Inner Circle における *native speakers* によって話される英語だけで学習することは、異文化コミュニケーションや異文化理解において偏りが生じることが懸念される。

異文化コミュニケーションにおいては、しばしば話者の英語の発音やなまりの違いが理解やコミュニケーションの弊害となる場合がある。その理由の一つとして、イギリスやアメリカなどの Inner Circle の話者による英語のみに慣れ親しみ、その他の Outer Circle や Expanding Circle に属する国や地域における人々が話す英語について認識する機会がほとんどないことが考えられる。また、そのような環境下の英語学習者は、*native speakers* の社会から受け入れられるように努力をしたり、*native speakers* の英語こそが正しいと信じていたりする可能性があるという(児島, 2017)。したがって、国際語としての英語を学ぶには、*native speakers* の英語のみならず、*non-native speakers* が使用する英語にも慣れ親しむ必要があり、World Englishes の観点から世界で話されている英語の多様性を認識することが、英語でのコミュニケーションにおける積極的な態度を促し、コミュニケーションをより円滑にする一助になり得ると考える。上記のような背景から、本稿においては世界の英語に表れる地域性や歴史的・社会的背景の違いを認めて尊重し合うことを目的とし、英語の多様性 (variety of English) を通じて大学生の異文化理解力の育成を試みた取り組みについて報告する。

### 3. 2. 実践活動内容

対象となった授業は1クラス38名の大学2年次のクラスとして通年(全30回)で行われた。授業科目の位置づけとしては、教養科目(基礎分野)としての外国語(英語)であったが、英語力のみならず、英語の多様性を知ることによって自信をもって自分の英語を話そうとする態度を養うとともに、英語の多様性を通して異文化を理解することできる学生の育成を目指した。授業内活動においては *native speakers* のような発音よりもコミュニケーションに重点をおいた活動を目指したため、授業用テキストは、『Global Activator: Your English, My English, World Englishes! 大学生のためのグローバル時代の英会話』(金星堂)を使用した。本テキストの特徴は、「国際英語論」や World Englishes の概念を取り入れ、学習者自身が話す英語に自信を持たせ、積極的に言語活動に参加できるように仕組まれている点である。収録されている英語の種類は *native speakers* の英語に加え、*non-native speakers* による英語が含まれ、計14の国や地域(日本、イギリス、インド、メキシコ、韓国、シンガポール、香港、アメリカ、オーストラリア、中国、ドイツ、ブラジル、フィリピン、フランス)に及び、内容は全て英語のみで表記されている。また各 Unit のトピックも大学生活、買い物、スポーツ、音楽、旅行など、様々な文化に関する内容となっている。会話を中心に、リーディングやディスカッションなどの言語活動が取り入れられ、積極的にコミュニ

ケーションを図るよう構成されている。さらに、学習者が英語を自分のことばとして使うことを肯定できるよう、World Englishes の視点からパッセージや練習問題が仕組まれている。

授業の進行手順としては、主にテキストの活動に沿って行った。各 Unit は、次の 7 つのセクションで構成されている：① TOPIC QUESTIONS, ② DIALOGUE, ③ EXPRESSIONS FOR INTERACTION, ④ WORLD ENGLISHES, ⑤ LISTENING ACTIVITIES, ⑥ READING ACTIVITIES, ⑦ GLOBAL ACTIVATOR。各 Unit の導入にあたる“TOPIC QUESTIONS”では該当 Unit の内容に関連した文化的トピックについて、学生が自分自身のことについて述べるインタビュー形式の活動から始められるよう設定されている。そのため、各自の情報について事前に語句や表現を調べることを授業外での課題とし、授業の始めにペアワークやクラス全体での発表により各自の答えを表現する場を設けた。“DIALOGUE”のセクションではそれぞれターゲットとなっている国や地域の variety of English に加え、日本人による英語とアメリカ英語の 3 種の対話を聴くことができる。したがって、native speakers と同様の発音の正しさにこだわるが故に積極的に話すことをためらう学生や、native speakers のように発音したりアメリカ英語を聞き取ったりすることが難しいと感じていた学生にとっては、日本人や non-native speakers による英語は比較的馴染みやすく、発音したり聞き取りやすい英語だったようである。各単元のターゲットとなる表現の練習として設けられている“EXPRESSIONS FOR INTERACTION”のセクションにおいては、モデル対話文にならってペアワークで対話練習をした後、モデル対話文の一部を学生自身のこと置き換える活動を行った。ここでも発音やアクセントのみならず、コミュニケーションに重点を置き、それぞれの意見や表現しようとしている内容についても自信を持たせられるような指導を心掛けた。インタビュー形式の音声収録されている“LISTENING ACTIVITIES”では再度 World Englishes に親しみながら内容に関するメモを取り、内容に関する質問に答える活動を行った。世界各国の文化に関する情報を読み解く“READING ACTIVITIES”では、音声はアメリカ英語のみによって収録されているため、英文の内容に焦点を当てて学生自らが自分のペースで英文を読むよう課題として取り扱うことが多かった。また、ディスカッションや学生が自分の意見について理由を述べる活動で構成させている“GLOBAL ACTIVATOR”のセクションでは、授業中に辞書を使用して自分の表現したいことを話したり、書いたりする時間を設けた。

### 3. 3. 実践活動の成果と課題

通年の授業全体の観察を通して明らかになった良い点は、World Englishes に触れる機会が増えるごとに徐々に学生が自分の英語を受け入れていく姿勢や様子が見受けられた点である。それまでに聞き慣れていなかった variety of English, 特に Outer Circle (例えば、シンガポール、香港、フィリピンなど) や Expanding Circle における英語 (例えば、中国、韓国、メキシコなど) に関しては、はじめのうちはそれらがあたかも不完全な英語のように聞こえていたようである。しかしながら、興味深いことに、Inner Circle の英語であるオーストラリア英語が使用された単位では、上記のような Outer Circle や Expanding Circle における英語よりもオーストラリア英語の方が聞き取りづらいという声が学生から多くあがった。さらに、比較的日本語とも近いとされる韓国話者による英語や、アジア圏の話者による英語はイギリス英語やオーストラリア英語よりも親近感があると述べた学生が多かった。英語での意思疎通に支障が出るほどの発音やイントネーションであれば繰り返し native speakers の英語を手本として発声練習していく必要はあったが、国際英語論や World Englishes の観点から日本の大学における教養科目としての外国語 (英語) 教育を考えると、必ずしも言語活動に native speakers のような完璧な発音を求めることはしなかった。



したがって、学生たちは自分たちの日本語なまりの英語も英語の一種として受け入れていたようであった。また、テキストに収録されているような様々な国の独特のなまりやアクセントのある英語に触れたことがきっかけとなり、その国の母国語に興味を持ち、民族性や文化について知る機会になったと思われる。授業後にその国の風土や食事などについて興味を持った学生から質問を受けたことも何度かあった。なぜ他国の *non-native speakers* の英語の発音が *native speakers* のそれとは異なるのか、あるいは日本人の私たちとは異なるのか、という疑問を持ち、彼らの母国語の特徴を知ることで、日本人の持つ独特な発音やなまりも自分たちの英語の個性の一つとして受け入れられるようになっていた。したがって、僅かなことではあるが、言語活動を通して異文化の視点を持ち、それらを認めて理解していくということに繋がる可能性を感じた。

一方で、言語活動によって異文化理解の視点を持たせる難しさもいくつかの点において感じた。まず、学生の他国に関する予備知識があまりに少ないと、前述のような異文化の視点をもつこととは反対に、その国の英語や文化に対する興味がたやすく薄れてしまう可能性があった点である。例えば、シンガポールの人々が話す英語（シングリッシュ）が使用される单元では、シンガポールに関する地理的・民族的な知識がほとんどない学生はシンガポールがどういった民族で成り立っている国かを全く想像できず、話し手のイメージを持つことができない。これは学生という立場や地域性による異文化体験の乏しさにも関連すると思われる。このようなケースはいくら多様な言語活動を行ってもその国や文化そのものを想像することが難しいため、異文化理解に直接繋がる可能性は低いと感じた。したがって、世界各国の英語を聴く前にターゲットとなる国の文化的、民族的、歴史的背景を補助的に説明し、さらに視覚的な資料で最低限の予備知識を与えることが英語の多様性を認識させるために極めて重要であると感じた。その上でその国独自のアクセント・なまり・イントネーション等、英語において表面化する言語的特徴や、その国の歴史と英語についての知識を深める必要があると感じた。第二に、言語活動を通して異文化の視点を持ち、異文化を理解することに繋がったと感じる点はあったものの、それぞれの学生がその文化についてどの程度理解したかについては評価が難しいと感じた。特に指導の点でも難しかった例が、オーストラリアのクリケットに関する英文を読み、学生がパートナーにそれぞれのパッセージに関する質問を自由に尋ねる活動である。英文の全ての意味を理解しても、そのコンテキスト、ここではクリケットという学生にとっては見たこともないスポーツやそのルールについて一定の知識がなければ、学生がその内容について質問を考えて相手に尋ねたり、反対に答えたりすることはかなり困難であったようだ。第三に、語学力も去ることながら、自分の意見に自信が持てず、それを英語で表すことに難しさを感じる学生が多かった点である。これにはさらに主として次のような要因が考えられる。まずは、クラスメートとの関係性（距離感）が影響しているように見受けられた。例えば小グループでのディスカッションの場面で賛成か反対かの意見を述べる際に、大多数の学生において周りの意見に同調する傾向が頻繁に見られた。もともと英語が得意であったり、英語学習が好きな一部の学生は自らのことについて、自分のことばとして英語を使用している感覚を実感している様子が見受けられた。まさに英語を異国の言語としてではなく“*My English*”として、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢から徐々に自信を持てていることがうかがえた。しかしその一方で、英語で表現することに自信が持てない学生は、それに加え、他者とは異なる意見を持っていたとしても周りの目を気にして、反論する英語力もないため諦めてしまう傾向が見受けられた。別の要因としては、英語による自己表現の場に於いて、他者から正しいと見なされる発言のみを求められていると思いついて点である。インタビューやディスカッションにおける自由度が高い質問に対しては正しい答えなどなく、コミュニケーションや話し合いによってより相応しいと思われる答えや考えを導き出す場

面においても、反対や否定をされることを恐れているかのように堂々と自分の意見を主張することに自信が持てない様子が見受けられた。

以上のように、英語の多様性を認識することは学生自身が自分の英語に自信が持てるようになり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲の向上や異文化に対する新たな価値観を得るきっかけとなり得る。その結果、より広い視野を持ち、僅かながらも他の文化を認めて尊重する態度の育成に繋がる可能性をもたらしたと感じた。しかしながら、その過程における異文化理解力の評価については限界もあった。授業科目としてはあくまでも英語の知識・理解や表現力を評価するものであり、本授業では各国の文化の理解度については評価に加えられなかった。今後はテキストの“READING ACTIVITIES”のようなリーディング活動を利用して異文化の理解を確認することも可能であるため、評価に加えることも検討したい。また、ディスカッションや学生が自分の意見について理由を述べる活動で構成させている“GLOBAL ACTIVATOR”のセクションでは、授業中に辞書を使用して自分の表現したいことを話したり、書いたりする時間を設けた。しかしながら、学生間で個人差があり、全ての学生が事前に語彙や表現を十分に準備しておく必要があると感じた。また、授業内活動で自分の英語には自信が持てるようになっても、自分の意見には自信が持てない様子が見受けられた。今後の外国語教育における異文化理解を見据えると、より多様な英語に視点を変える必要があると感じられるため、各学生の World Englishes に対する評価については、様々な英語による聴こえ方や理解度に関するアンケートを行い、より詳細なデータによって分析・考察する必要がある。また、世界各国の文化の違い認め合い、尊重し合う姿勢を育成することを前提とするならば、今後は異文化理解の「異文化」という表現自体も考え直す余地がありそうだ。

## 4. 実践報告 2

### 4. 1. 異文化理解実践研究

本授業は言語文化学科共通科目であり、中高英語教員免許取得希望者にとって必修科目となっている科目である。本授業では人と人とのコミュニケーションがどのように行われているかを異文化理解の観点から学んでいき、言葉・文化の多様性に重点を置きながら、日本語と比較していき英語の表現へと応用していく。また、共生の時代である 21 世紀を生き抜くためのスキルを習得していきながら、語学専門教育の基礎となる異文化理解の知識を習得していく。

上記のような授業概要および目的のもと、多文化化する社会、ステレオタイプ考察、文化差考察、異文化への適応プロセス、世界の言語政策、語用論的アプローチ（日英比較）、社会言語学的アプローチ（日英比較）、英語の多様性、ノンバーバルコミュニケーション（日英比較）といったトピックについて異文化理解についての講義を行った。また異文化理解における実践演習的な側面として、地域の教育現場における国際交流の調べ学習および地域小学校の学校だよりの英語訳を行った。

#### 4. 2. 授業内活動<sup>2</sup>

本授業の受講者は Google Classroom を使用しながら、6 人程度のグループになり活動をおこなっていく。担当教員は Classroom を通じて、各グループと連絡を取り合うことになる。実践演習の部分である地域小学校の学校だよりの英訳は以下の図 2 にあるような資料の共有から始まる。

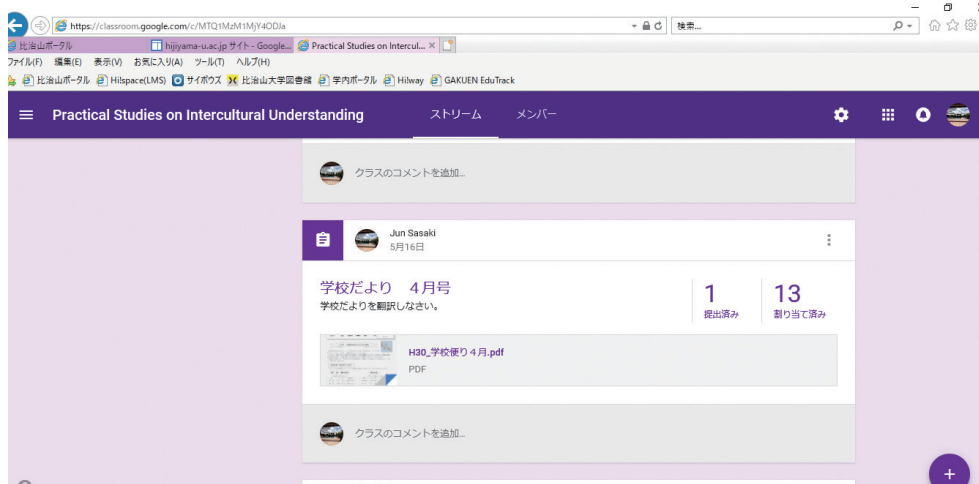


図 2

Classroom を利用することにより、担当教員と受講者のコミュニケーションが可能となることに加えて、グループ内でもコミュニケーションが図れることになる。加えて異なるグループがどのような進捗状況かまた英訳の内容について閲覧可能となり、クラス全体で情報の共有が可能となる。グループ内で地域小学校の学校だよりの中から国際交流に関する記事が掲載されているものを取り出し<sup>3</sup>、各グループで英語訳を行っていく。下記は受講生が行った英語訳に担当教員が修正を行ったものである。

<sup>2</sup>2020 年度は COVID-19 感染症防止により、オンラインで授業を行ったため授業内容の修正を余儀なくされた。そのため本セクションで扱う授業資料は 2018 年度のものに掲載している。

<sup>3</sup>地域の小学校の学校だよりはホームページから閲覧でき、一般に公開されている。

# appreciation

School news letter H30. June 31st  
Hiroshima Municipal Hesaka elementary school  
THE 3rd

*Thank you for cheering in sports festival.*  
Just-ended sports festival. Students has a lot of practice since end of holiday. Thank you for cheering parents and community. Especially, Hesaka women club "Danmono" coaching for upper grades students since before the fact. Current day, all students exercise fruit, so well-transmitted there desperation. This year introduce entrance procession.

This year's sports day, introduce entrance mach. The march it seems was unfamiliar for children, but practice repeatedly in the production, grew up to be a wonderful much.  
Especially sixth graders during the practice we felt of being a leader of Hesaka elementary school, in the from of work of the staff, committee activities, practicing gymnastic exercises and can't breath and finally a accomplished them all  
At the end of the sports day, thank you from the bottom of my heart that many parents ~~did~~ remain and will helped to withdraw the tent and move the soccer goal.

our

put away

I learned "life" through evacuation training.

We conduct evacuation drills three times a year in order to "safely and quickly evacuate when a fire or a disaster occurs" and "to cultivate the spirit of respect for our own lives through evacuation drills".

This time, I did the training for the first time this year. The children did not have a word of mouth, but they hunched in their mouths and evacuated from the classroom to the playground in accordance with the teacher's instructions.

After I lined up in the school yard, I heard a story about the greatness of protecting my life from the principal.

The next time I will go in the fall.

We will be able to conduct actions that are even faster and more accurate than this time.

(We before)

Doctors name

Health checkup is carried out

Understand the health condition of children properly, in order to maintain and promote mental and physical health, Hesaka School is doing medical examinations.

A medical checkup done by inviting a doctor include "Dentistry", "Otolaryngology", "Internal medicine" and "Ocular".

The examination is visual acuity, hearing ability, urine. Although it is necessary to wait quietly for health examination, the children were in good posture, waiting for their turn.

We will distribute "Notification of inspection results" to each household promptly after hospital examination and examination from home room teacher.

図 3

受講生は地域小学校の学校だよりの英訳を行うことにより、疑似的な地域奉仕活動に従事することになる。授業中に地域奉仕活動を取り入れることで、学びにつなげていく手法はサービス・ラーニングと呼ばれる。本授業では学生の異文化への理解を涵養させていくという目的の中で、サービス・ラーニングという手法を使っていった。受講後の学生のコメントは以下である。



- (1) a. 学校だよりの英語訳を行うのは初めてだったが、学びが深まったように思う。
- b. 英語訳は非常にハードだったが、知識が深まったように感じた。
- c. 他の受講生との共同作業がよかった。
- d. 問題解決がグループでできた。

コメントは一部であるが、異文化への理解は個人での作業よりもグループでの作業の方が学びが深くなると受講生は考えているようである。

#### 4. 3. 今後の課題

本セクションでは、対面授業形式による異文化理解実践研究の実践報告を行った。しかしながらポストコロナ後の教育はそれ以前のような手法とは異なった手法が必要になってくるかもしれない。実践的な内容は対面での授業を中心に行われるべきであるという考えもあろうが、今後はオンライン上で実践的な内容を実施できるような手法の開発が必要になってくるであろう。筆者（佐々木）は実際オンラインでのグループ活動を他授業で取り入れており、またオンタイムでのやり取りも可能であるため、実践的な内容をオンラインかつオンタイムでの指導が可能であると考え。今後はそのような取り組みを促進していくことにより、オンラインでも受講生への異文化理解の涵養を促していく手法を考えていく必要がある。

#### 5. まとめ

セクション2では、CEFRやUNESCO、文部科学省指導要領を参照しながら、外国語教育における異文化理解について概観していった。セクション3では、世界の中の英語という観点からWorld Englishesに焦点をあて、多様な英語を話す人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を試みた。今後は異文化理解度に関する評価が課題であることと「異文化」という言葉自体の再定義に言及した。セクション4では、地域の学校の国際交流に目を向け、学校だよりをグループで調べていき、英語訳を行うという授業内での協働作業についてのアプローチの可能性について探っていった。その中では、オンラインによる教育方法に言及した。今後は対面とオンラインの両方を使用したいいわゆるハイブリッド型の授業の可能性を探っていく。

#### 引用・参考文献

BBC News (2018, May 23) <https://www.bbc.com/news/world-44200901> [accessed November 27, 2020]

Council of Europe (2001) *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*, online version. <https://rm.coe.int/16802fc1bf> [accessed November 2018].

Crystal, D. (2003). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Leo, Joy de (2010) *Education for intercultural understanding*, online version.

<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000189051> [accessed November 2018].

National Curriculum Standards (2018) Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan.

児島千珠代. (2017). 「大学カリキュラムにおける World Englishes」『言語教育研究』平成29年第9号, 清泉女子大学言語教育研究所, pp. 53-67.

塩澤正・King, G.A. (2015). 『Global Activator: Your English, My English, World Englishes!  
大学生のためのグローバル時代の英会話』 東京：金星堂.